

湾岸ワンダーランド アブダビのアラビアンナイト国際会議に参加して

昨年末、初めてペルシア湾の南側の国を訪れる機会があった。

二〇〇九年二月一五日から一七日にニューヨーク大学アブダビ校で開かれた国際会議「アラビアンナイト——文学と芸術における遭遇と翻訳」に招待されたのだ。大阪の自宅から関西空港までの車の手配あり、フライトはビジネスかファーストクラス、滞在は四つ星の高層ホテル、三食すべて主催者もちといった要人待遇で、まるで「空飛ぶ赤じゅうたん」がお迎えにきたようだった。

しかし何もわたしの業績がノーベル賞級だからというわけではない。イギリス、フランス、ドイツ、アメリカ、エジプト、チュニジア、インドなどから呼ばれた四〇人以上の参加者たちが、みな同じ待遇で招待されていたのである。その顔ぶれは、アラビアンナイト界の大御所から、まだ博士論文執筆中という若手のアメリカ人大学院生まで幅広く、また、学者だけでなく、作家、演出家、映画監督、ジャーナリストと



アブダビのスカイライン

いった異分野の専門家も招来されていた。

●巨額の国家予算と文化政策

ニューヨーク大学アブダビ校は、二〇一〇年秋に正式に開講する予定のできたてほやほやの大学である。国際的なネットワーク大学を目指すニューヨーク大学と米国式の研究教育機関を地元に見るアブダビの首長国が提携して設立されたもので、今回のアラビアンナイト会議は、ダウンタウン・キャンパスで初めて開かれた国際的な集会らしい。二〇一〇年頃には、アブダビ沖合に建設中のサアディヤト（幸福）島にメインキャンパスを移転するという。

話はそれるが、このサアディヤト島がまた、巨額の国家予算がつぎ込まれている驚愕の巨大プロジェクトである。無人島を文化の島にしてしまおうと、フランスのルーブル美術館やアメリカのグッゲンハイム美術館の分館、海洋博物館、歴史博物館、劇場などの設計を安藤忠雄を含めた世界中の著名な建築家に依頼している。今の日本は「マンガの殿堂」ひとつ建てることすらかなわないが、島ごと文化施設にしてしまおうというアブダビでは、ナイアガラ滝のごとく、お金が轟音をたてて流れて

いるようである。

●国際会議での発表

「わたしをこの壇上に立たせるために投入された費用がおよそ……、そしてそれを発表時間の二〇分で割ると二分あたり……」などとコストパフォーマンスのことを考えると、発表にも気合が入った。わたしは「日本の古典芸能になったアラビアンナイト」という発表で、狂言や歌舞伎に翻案された千一夜の話や、二〇〇四年の特別展「アラビアンナイト大博覧会」の際に制作した講談や落語バージョンの語りの映像を紹介した。同じく民博から参加した西尾哲夫教授は同じパネルで「宝塚歌劇におけるアラビアン・ファンタジー」について発表された。極東の日本の舞台芸術における千一夜の受容には、欧米・アラブの参加者がみな大変関心をもってくれた。イギリスの演出家は、「アラビアンナイトの語りを違和感なく再現できる伝統的な芸があることは素晴らしい」と言ってくれた。「ぜひまた呼んでほしい」と言い残し、空とぶ赤じゅうたんにまた乗って帰ってきた。



巨大なシャイフ・ザイヤド・モスク

やまなか ゆりこ
山中由里子
民博民族文化研究部

専門は比較文学比較文化。アレクサンドロス大王の死後に彼にまつわるさまざまな言説が、古代ギリシア・ローマ世界からイスラーム世界へどのように伝わり、展開したかを研究している。『アレクサンドロス変相—古代から中世イスラームへ』（名古屋大学出版会、二〇〇九年）